

倭蘭王国の歴史と墓室の調査報告

山田 勝久

一、倭蘭の興亡

二〇〇三年と二〇〇四年の春、私は中国の新疆に住む大阪教育大学大学院の修了生の案内で、倭蘭王国を調査した。都の倭蘭故城（クローライナ）は、タクラマカン砂漠の中、東経八九度五五分二二秒・北緯四〇度二九分五五秒にあつた。幻の湖といわれるロプ・ノールの湖岸の西方からは、約二八キロメートルに位置している。故城を調査したところ、まわりの城壁は不規則な正方形で、東の城壁の長さは約三三三・五メートル、南の城壁の長さは約三二九メートル、西と北の城壁の長さは、ともに約三二七メートルであつた。四方は城壁で囲まれ、築城方法は敦煌付近にある漢の長城と同じ版築で、城門は南・北・西にあり、東の城壁は一部しか残っていないので、門の有無は確認できなかった。

二世紀から四世紀頃には、多くの旅人が往来し、史書によれば常時約一万七千人が住んでいたという。城内には大きな灌漑用の用水路が一本引かれており、住民はこれを利用して生活用水を取っていたと思われる。城外にも、南に三本、北に一本の河の跡があつた。その他、北方五・六キロメートル先には、孔雀河から数本の支流が流れており、

今日でもその河床跡を見ることができた。

城内にある最も高い建物は仏塔で、十・四メートルあるが、朽ち果てる前は、更に数メートルは高く聳えていたと思われる。この仏塔の基礎の台は正方形で、一片の長さは十九・五メートル、塔は円形でアソカ大王時代のインド形式の建造物である。この塔の南には仏殿が置かれていたらしく、直径二十センチ前後、長さ約五メートルの胡楊の建築材が数十本散乱していた。スタインはここから美しい木彫りの仏像や椅子などを発見している。

楼蘭故城のほぼ中心にあるのが、唯一レンガで造られた三間房である。建物には五つ部屋が並んでいるが、真中に南向きの三つの部屋があり、東西は十二・五メートル、南北は八・五メートルもあった。家屋の基礎に一本の長さ六・四メートルの赤い漆塗りの胡楊が埋められており、楼蘭故城の中央官庁であった可能性が高い。城内の南と西は、住宅地区で、壁は葦と柳の枝を並べ、草の紐で縛ってある。とくに、西の建物は広く堅固で、玄関、母屋、後室があり、庭付きの部屋もあった。

この町の名が、初めて中国の史書に見られるのは『史記』巻一一〇、匈奴列伝、前一七六年の項、匈奴王が漢の文帝にあてた手紙の中である。すなわち「天の降したもうた福運によって、軍官兵卒はすぐれ、戦馬は力強く、われわれは月氏を滅し、その民を斬り降伏させ、楼蘭・烏孫・呼揭およびその近隣の三十六国を平定し、すべて匈奴の領土とした」の一文によってである。『史記』巻一一三、大宛列伝にも「楼蘭・姑師は町に城郭があり、塩澤に臨んでいゝ」とある。また、張騫が武帝に奉った報告書によって、当時の人々は「絶域の地、遅く曠濶であり、崖はない」(楼蘭漢文簡牘)として、漢土の遙か西、敦煌を越えたヤルダンの彼方に、楼蘭という多様性を持った町があることを知った。漢代の楼蘭の規模は「戸数一五七〇、人口一四一〇〇、兵士二九一二」(『漢書』巻九六上、西域伝)とあり、ホータン(于阗)の玉が中国に伝わる中継地であったことから、「玉を出す」と記されている。

楼蘭故城は、魏から晋にかけて、中原から派遣された西域長史が駐留した拠点であり、他民族が行き交う国際的な都市として賑わっていた。城の東七キロメートルにある墓地で使用された木棺は、炭素一四の測定によれば、一つは二〇四〇±九〇、今ひとつは一八八〇±八十五と発表されている。

この楼蘭故城の西約二〇キロメートルに位置する営盤城も、西域南道と北道が分岐する要衝の地であったことから、三世紀から四世紀にかけて大いに繁栄していた。その正確な位置は、北緯四十度五十六分三十四秒、東経八十七度四十秒である。一九九五年十一月から十二月にかけて漢民族とウイグル人による学術的な発掘調査がなされた。一五号墓の男性のミイラは金箔で飾った仮面をつけており、身長は一八〇センチもある。身に付けていた袍の紋様は、牛・羊・人物・樹木などで、ペルシヤ芸術の影響を受けたものであった。大型墓地の東側には、約六千平方キロメートルの範囲に、仏塔を伴う仏教寺院遺跡が残存し、美しい耳飾や毛織物が随葬されていた。

神爵二年(前六〇)、匈奴の日逐王が漢に降り、これを機会に漢は護鄯善以西使者校尉鄭吉を西域都護に任じて、シルクロードを支配させた。以後、楼蘭は漢と匈奴の双方に人質を入れるなど、王国は数奇な運命をたどり、『後漢書』には、章帝の建初元年(九六)からは、漢兵が楼蘭に長期にわたり駐屯し、西域の重鎮となっていたと記している。

しかし、漢の勢力が去ったあとは、楼蘭はタリム盆地のほぼ中央に位置する要衝の地であることから、大いに繁栄している。胡商は、西域の物産である大宛のガラス、安息の香料・胡麻・胡桃・胡椒・胡瓜珍しい花草・葡萄など、また馬・牛・羊などの他、毛皮・毛布などをもつて、東に旅立っていく。『後漢書』西域伝に「商胡販客は日々塞下に款る」とあるように、自由貿易都市として隆盛していった。ここに来てきたのは、長安・貴霜・安息・大宛・康居などの国から派遣される使者や商人や僧侶や兵士であった。多い時は一年間に二千、少ない時も五・六百に達していた。遠く大月氏国からもたびたび使者がやってきており、その顔色や容姿に楼蘭人が驚嘆しているさまを、「三十人の使者の中には、顔の色が黒くて目が大きくヒゲを伸ばしている」・「五十六名の従者の中にはヒゲをはやし、頭に白い布を巻いている者もある」等と、楼蘭出土の漢文木簡文書は記している。

楼蘭から出土した古代西北インドの文字、すなわちカローシユティで書かれた史料によると、二世紀から四世紀にかけてが、楼蘭と西方の大国クシャン朝との最も盛んな交流期であったことが判明する。都のクロライナを出発してミールン（未蘭）へ、そして点在する西域南道の且末国→小宛国→精絶国→戎盧国→扞弥国→渠勒国→于闐国→皮山国→莎車国を経てクシャン朝へと道は続いている。その間、楼蘭はその支配地域である東西約九〇〇キロの交通要路に駅を設置し、旅人の便利をはかっていた。今日でも王の命令や通達、土地契約書、私用の手紙、売買契約書などが各地のオアシスから出土、これは広大な支配地ながらも、その間の絶えることなき通伝の事実を証明している。また、楼蘭王は于闐王と共にたびたび入貢し、中原王朝と交流を深めている。その結果、ロブ・ノールの西北岸に位置する首都クロライナには、国際色の濃い文化が誕生し、高度な文明が開化した。

漢の支配のあと、三世紀から五世紀の中央アジアの政治的支配は大きく六地域に分かれていた。すなわち、高昌・焉耆・龜茲・疏勒・于闐・鄯善（楼蘭）である。とくに楼蘭は四世紀中頃、クロライナを中心に、ミールン・チェルチェン・ニヤといった西域南道のオアシスを支配下に置く一大強国となっている。国王は「徳篤く正法に住する国王陛下、天子アムクヴァガ」等とあるように、仏教を信奉し、王妃はしばしば同じ仏教王国であった于闐の王女であった。

なお、この時期の楼蘭出土の文物を見ると、円蓋の下で跣座した四体の仏像が彫られた板の文様はペルシャ風、一仏一仏にガンダーラの仏教美術が色濃く影響しており、その芸術性の高さから、時空を超えた彫刻師の仏教信仰の深さを知ることができる。また、柱はギリシャやローマ建築様式を受け継ぎ、ポプラ材の木彫りの三叉を手にして、玉座の前で結跏趺座する人物の姿は、莫高窟二七五窟の菩薩像と類似している。

楼蘭支配地域からの出土品は多岐に及び、前漢や後漢の五銖銭の他に、王奔の治世の貨幣や、騎馬やラクダの図案を描いたクシャン朝のコインも発見されている。また現地で鑄造された五銖銭も出土しており、「一万存銭二百」・

「徹取万銭」・「銭出利」・「今在郡便錢市」・「買敦煌錢二万」等の出土文書に示されるように、この地においては物々交換の交易だけでなく、貨幣経済が早くから確立していたことを示している。なお、『魏書』食貨志に、西域のオアシスでは、「国を挙げて、臣民は銭を負い貨を懐にす」とあるが、それぞれ自分の国で貨幣を鑄造していたようである。二〇〇五年八月と十一月に、西域三十六カ国の一つである天山南麓の尉頭国（トムシュウ）の古代遺跡を調査したが、この国からも、五銖銭の鑄型が発見され、貨幣も見つかっている。

ところで、楼蘭古城からの出土漢文書には、おびただしい年月日の記述が見られる。私たちは、一九九一年『新疆文物』編集部が出版した『羅布淖尔資料彙輯』により、その出土文書の年号が完全な形で判読できる。たとえば、一番多い年号は、晋の司馬炎の年号である泰始（二六五―二七四）の三十四回、次いで魏の咸熙（二六四）の八回、西晋の永嘉（三〇七―三二二）の三回となっている。紀年範囲は、一番古いのは魏の斉王、曹芳の嘉平四年（二五二）、一番遅い年号は建興十八年（三三〇）である。この事実が楼蘭が最も繁栄を極めたのは、三世紀中頃から、四世紀初めであることを証明している。

楼蘭が滅亡の兆しを見せはじめたのは、四世紀末のことである。人口の増加に伴って食糧不足になり、住民は土地を大切にするという農耕の習慣を破って、二毛作を行なうようになり、そのため、灌漑によって土地に塩分が集積し、農業生産の可能なわずかばかりの土壌をも荒廃させてしまった。さらに、汚水処理も思うようにならなくなったようである。

また、住民は数多くのヤギを飼い、草を根こそぎ食べさせ、暖をとるため大切な樹木までも伐採してしまったのである。楼蘭人は、王国の未来の繁栄や子孫の存続を願うことなく、目先の欲望にのみ心をとられ、自分たちさえ幸せな生活をすればよいと考えるようになってしまい、限りある自然をも破壊してしまったのである。すなわち、楼蘭王国の滅亡の要因は、外部からの攻撃のみではなく、住民の精神の荒廃にも起因したと考えられる。

折りしも、五世紀に入ると気候の変化によりロプ・ノールが枯渇し始め、湖に注ぎ込んでいた孔雀河（コンチュエ・タリア）の流れが変化し、しだいに湖に到達しなくなつた。地域住民は井戸を掘るために心を尽くすことも、どうしたらよいかとの知恵を出しあうこともしない。そのため、クロライナは次第に荒廃し民衆は各地に流出して、とうとう王都は放棄され、五世紀の初期には南方のミールンに移されたようである。

なお、前述の如く、楼蘭出土の漢文文書の紀年の古いものは、魏の嘉平四年（二五二）である。ところが、楼蘭の歴史は古く、中国との交流は前漢王朝までさかのぼることができる。すなわち、クロライナ出土文書よりも約四〇〇年も前から交流がありながら、クロライナからはその間に書かれた一片の文書も出土していない。私が城内を調査したところ、その地層は風砂によって深く削り取られており、古文書はもういかに発掘しても何も出てこないことを確信した。

それでは、前漢から晋初までの四〇〇年間、都はどこにあつたのであろうか。私自身は、楼蘭北東約二十キロ、方城こそ古代楼蘭王国の初期の都ではないかと思ひ、二〇〇四と二〇〇五年の二回調査した。その成果として、方城は孔雀河の本流の下流にあり、近くに漢代から三国までの古墳墓地が多いこと、二〇〇三年三月に発見された壁画のある丘陵も、クロライナの郊外ではなく方城の近くにあつたこと、方城の築城方式が版築ではなく、楊柳や紅柳を泥の間に挟みつつ積み上げた素朴な造りであることによる。

ところで、西暦三九九年に敦煌からクロライナへ、そして焉耆を経由した法顕は、クロライナで約一ヶ月間滞在している。その時の感想を、「国王は佛法を奉じており、国内にはおよそ四千人の僧侶がいる。すべて小乗仏教である」と記している。この記録により、また王国は存在し国都もそのまま、住民が住んでいたことが分かる。しかし法顕は、「楼蘭の土地はやせて、満足に耕作されておらず、住民は貧しい生活をしている」とも述べ、楼蘭が滅亡寸前であつたことを窺わせる内容となつてゐる。

思うに、楼蘭では老人や幼児を含めて約一万七千人の住民のうち、四千人が出家者という人口の異常構成は、楼蘭の経済活動を次第に破壊に追いやり、滅亡へと転落させていった。学・素養のない僧侶の増加は、法を説き民衆に希望や勇気を与えるというのではなく、ただ自らが安楽のうちに生きんがための出家であつた。

林梅村氏、〇三七号「贖胡女舎」の一節は、女性の奴隷売買も行なわれていたことを示している。カロシユティ一文書にも、婦人が息子だけでなく娘までを、わずかのお金で役人（書記）に売り渡しているようすを記述している。また出土文書に「命令、販売された少数民族の女性を釈放するように」とあり、奴隷売買に関する法律の規制があつたことも分かる。人身売買は年齢や姿形によって代価は異なるが、平均すれば、男は羊二十匹、女は羊十五匹ほどの値段であつたようだ。

また、林梅村氏三五九号は、住民の貧苦をよそに、住職が酒と肉をたらふく食べ、三七五号は、国王より別荘の贈与を受けたことを記している。楼蘭の僧侶は官職にもつき、土地や奴隷を有した豊かな生活を基盤に、妻帯する者も多くおり、権力者と出家者の結託は、しだいに清貧を旨とする聖僧ではなく、僧の合法的な婚姻をも認めるようになっていった。カロシユティ一文書四一八号でも、僧侶が妻帯し、広大なブドウ園や土地や奴隷を有しているようすが明示されている。さらに出家者は、商品取引や質契約にも従事し、その経済的豊かさ、さらに僧の腐敗をまねいていった。仏道修行にも励まず、あげくの果ては五七号に示されるように「彼らはあの女を殺した。……全額賠償すべきである」と、殺人事件まで起こしている。

また、僧と僧の暴力事件は日常茶飯事で、あまりにも低レベルの事件が多いので、クロライナの高僧は、楼蘭における僧の悪しき世俗化と懶惰な姿を、罰則で厳しく規定する法律を制定した。四八九号の木簡は「偉大な国王、天の息子である夷都伽・摩希利陛下、在位の十年十二月十日・……最近、沙弥らが長老の言うことに従わない。……僧侶規制を決めて欲しい」と訴えている。しかし、カロシユティ一文書四二五号・五〇〇号・五六二号・六五五号に示

されるように、法律を無視し土地の売買であくどく金儲けをし、僧が金を借りるのではなく、高利で金を貸す方であること、また、僧侶が土地を占有したり、税金を勝手に徴収した事実もあることが、歴史の証言者のごとく綴られている。

ところでカローシユティイ文書に名が出てくる楼蘭の国王は五名で貝比耶（二四七年）・陀闍伽（二五四―二五七）・安婦伽（二五五―二九五）・摩希利（二九三―三三二）・伐色摩那（三三二―三三四）である。四四五年、北魏の太武帝は、二回にわたって楼蘭（鄯善）を攻撃、四四八年には鄯善王として都に韓牧を送り込み、とうとう楼蘭王国の命運は尽きてしまった。五世紀末、南斉の益州刺史劉俊が派遣した使者の江景玄が、于闐に赴く途中に楼蘭に入っているが、その報告書によれば、すでに王国は丁零のために破られ、民衆も散尽していたと述べている。

西暦五一八年（神亀元年）十一月、北魏の靈太后胡氏は、沙門惠生を西域に派遣した。惠生の行程は、吐谷渾↓左末城（且末）↓于闐となっており、無人の廢墟となったクロライナには入っていない。この時期、楼蘭の都はミールンからさらに西へ移動してチャルクルクに移り、吐谷渾の寧西將軍は、三千の兵士をもってこの町の防備を固めていた。隋の煬帝は鄯善県を設置して、楼蘭の昔の繁栄を取り戻そうとしたが、人心の荒廃と河水の不足はいかんともしがたく、しばらくしてこの方針は放棄された。六四四年、唐の玄奘が天竺の帰途、楼蘭王国支配下のミールンを通過した時には、「城郭は残っているが人煙はない」（『大唐西域記』）という状況で、住民は誰一人いない廢城であったことが分かる。

楼蘭の最後の記録は、『新唐書』西域伝である。そこには、焉耆国は唐と協力して昔の楼蘭道を復活させようとしたが、高昌国の反対にあつて実現しなかつたと述べられている。それ以後、楼蘭は長い間忘れ去られ、幻の王国として流沙に埋没、その位置さえも不明になってしまった。十三世紀にシルクロードを通ったマルコポーロは、楼蘭のことを全く記していない。

楼蘭の名が歴史上から消えて、その存在が再び世に出たのは、二十世紀に入ってからである。スウェーデンの探検家スウェン・ヘーデンのガイドの艾爾得克は、一九〇〇年三月二十八日に楼蘭の遺跡を偶然に見、翌年、三月三日から九日にかけてヘーデンは、楼蘭の王城クロライナに入った。そこで古代中国の貨幣、小さな銅製の飾り、ガラス製品その他、貴重な漢文紙片文書三五点、漢文木簡一二〇点、カローシユティイ文書百枚余りを見つけた。

ここで注目すべきは、カローシユティイ文書の木簡によれば、五人の王の最後の夷都伽・伐色摩那の治世（三三一年から三三四年）になると、住民が逃亡し始めていることである。二二七号には「逃亡者一名を速やかに送るべきである」、七六〇号にも「偉大な国王、天の息子である夷都伽・伐色摩那陛下の十一年七月、人々は国を離れ、遠くまで行った」とある。この国王の即位は三三二年であるので、その治世が即位してより十一年経過していることは、西暦三三三年にあたり、奇しくも楼蘭出土文書で一番遅い西晋の愍帝、司馬鄴の建興十八年（三三〇）とほぼ一致している。

また、イギリスのスタインの楼蘭支配地域の探検は、三回実施されている。第一回目は一九〇〇年―一九〇一年、ニヤ（尼雅）の発掘が行なわれ、魏の景元五年（二六四）から泰始六年（二七〇）までの紀年のある木簡五〇片を手に入れた。中には、検封の箱の蓋に楷書で「詣鄯善王」の文字が書かれたものもある。

第二回目は一九〇六年―一九〇八年、楼蘭故城にて、木簡や永嘉六年（三二二）の紀年のある残紙など九九一点を手に入れた。第三回目は一九一三年―一九一六年、木簡や残紙など合計六〇七点、また、クロライナ、漢晋墓地、方城、海頭古城などの発掘からは、数多くの漢文木簡、クシャン朝のコイン、カローシユティイ文書、五銖錢、ソグド文書、毛織物等を発見した。

日本の大谷探検隊の橋瑞超らも、一九〇九年三月と一九一一年一月に楼蘭を訪れている。『晋書』張駿伝によれば、三二四年、前涼王となった張駿は、部下の李柏を楼蘭に派遣した。この西域長史の李柏なる人物は、『十六国春秋輯

補」の「前涼の巻」によれば「張駿の太元四年……西域長史の李柏は、反乱者の趙貞を攻撃したが、軍が趙貞に破れた。朝廷には、この失敗の責任は李柏にあり……」との、三二七年に焉耆国王の龍熙に送った四枚の書簡の草稿「李柏文書」をはじめとして、大量の仏教の經典を見つけ、世界の東洋学界の注目を集めている。ただ、シルクロード研究者の間で、この「李柏文書」の真偽のほどが、近年問題になっており、今後とも論争は続くものと思われる。

二、楼蘭の墓室の壁画について

二〇〇三年三月二日、「世紀の発見」と題するニュースが、新華社の報道として日本でも各局で放映されていた。それは楼蘭から大量の極彩色に満ちた壁画が発見されたという内容だった。壁画や木棺やミイラ等が出土した場所は、楼蘭故城より北東に約二十四キロ、方城からさらに北東に三キロ程行った土垠遺址の中にあつた。土垠遺址は、北緯四十度四十六分、東経九十度十二分、漢の時代にあつた宿駅で、遺址は約南北一一〇メートル、東西約九〇メートルの半島状の台地に位置している。ここから、前四十九年から前十八年にかけての日付が確認できる木簡が七十二点発見され、五銖銭や王莽の新朝が発行した貨幣や漢代のシルク製品や漢代の矢じりなども数多く出土している。この事実は、まさに方城こそが、楼蘭王国の初期の都であつたことを証明し得る手がかりの一つでもある。

楼蘭の墓室は、横が約二十五メートル、高さは約二十メートルの丘陵の上層部の地中奥深くにあつた。まるで天空の墓室のようであり、入口は南面し、幅一メートル、長さ七、八メートルの甬道がある。第一発見者は、二〇〇三年一月三十一日に主発したウルムチ市登山協会の趙子允会長を中心とする十人余のロブ・ノール探検隊である。二〇〇三年二月十日付の朝刊紙「晨报」は、二月三日の発見時のようすを次のように紹介している。

探検隊の前方を、一台の白い色をした二二三型の四輪駆動車が、猛スピードで走り去って行った。その車は「黒車」と呼ばれる、ナンバーも付いていない犯罪者がよく乗っている盗難車であつた。不審に思った探検隊員が、

車の溝跡をたよりに追跡したところ、目の前に展開した光景は、ただ驚き悲しむばかりの惨状であつた。墓陵の室内はひどく破壊され、大腿骨や上腕骨等が散乱していた。前室に五体、後室に四体のミイラがあつた。死体のほとんどは、木棺を乱暴に叩き割ってこじ開け、身に纏っていた衣服等をはぎ取られる時に、原形を保つことなくバラバラになつてしまつた。

新疆文物考古研究所の于副所長等のメンバーは、三月十日にウルムチを出発し、日をおかずして現地を訪れ、墓室の調査を開始している。その後、中国の研究者による墓室調査の中間報告、たとえば埋葬された年代とか人物についての私見が、中国と日本の新聞で数回紹介されている。

そうした中で、中国で発刊された『文物天地』二〇〇三年四月号は、楼蘭の墓室とその壁画の大部分をカラーで紹介、墓室発見についての初期段階の資料としては貴重なものであつた。私は読売新聞の二〇〇三年四月二十二日付夕刊の「文化」欄に「大量の原色壁画発見」と題して、楼蘭王国の陵墓の壁画のすばらしさについて、趙会長より送られてきた二枚の写真を添えて発表した。

二〇〇三年三月、趙子允会長の指南を受け、日本人として初めて私は十六名で構成された楼蘭踏査隊を結成し、トルファンから魯克沁を経て楼蘭の壁画の場所まで車で走つた。三日半かかり、走行距離は約七二〇キロメートル、野営は五日であつた。トルファン道は唐代にはかなり利用されており、各地で唐の漢文文書や、開元通宝が出土、しかし、今では往古の道はほとんどなく、あるところは湿地帯であつたり、またあるところは峡谷の合間をぬうように走つたり、紅柳や胡楊やラクダ草の繁茂する道を通ることもあつた。古墓が近くなると、あたかも人間の来訪を拒絶するかのように凸凹したヤルガンが続き、四WDの専用車も動きがとれなくなることもたびたびであつた。しかし、墓室まであと五キロという距離まで近づくと、平らな砂漠が続いていた。

GPSで測量したところ墓室は北緯四十度三十九分、東経九十度の七分のところにあつた。海拔は七二一メートル、

方城の遺跡からは約二キロメートル北方、曲折した径であったので、車では約四十分かかった。

墓室の入口は南向きで、中を七・八メートルほど進むとまず前室に入る。前室は約二十五平方メートル、後室は約二十平方メートルである。前室の真中には法輪を描いた直径七・八センチの中心柱があるが、上部は折れていてまったく無い。残った柱の高さは約二メートルほど墓壇は厚さ約十センチ余の正方形であった。

前室の左壁、すなわち私たちが入口に入ったすぐ右の壁には、六人の人物像が色鮮やかに描かれ、まん中の二人は夫妻である。壁画のうち四体は、盗人が上部から侵入した時に爆破されたため、首から上が無く、一体は薄ぼんやりと顔のみを見ることができ、もう一体は口髭、顎鬚のみを見ることができ、鼻からは破壊されていた。六人も右手に横長の皿や縦長のグラスのような型をしたガラス盃を持っている。髭は直毛で、腕の先の白い下着の先端は折り曲げている。

右側三人のベルトの文様は、ペルシヤ的である。左三人は右三人と若干衣装は異なるが、服装に見られる力量感あふれる筆線は流暢適格、細緻でありながら律動感に富み、伸び伸びとした軽やかさと先進性が見られる。使用された顔料は六〜八色で、とくに水銀朱の赤とアフガニスタン北部産と思われる群青色（ラピスラズリ）は、壁面の白色とよく調和し色鮮やかだった。

この墓室は楼蘭の貴族のものではなく、その服装や顔形や髭などから、すなわちソグド人の大金持ちではないかと考えられる。この時期、ソグド人がシルクロードや中国本土に住みつき、その主たる集落が中国西域に三十五前後もあったことが分かっている。おそらく壁画に描かれた六人も、貿易商人の一族の画像であったと推察される。壁画には人物だけでなく、前室西壁には、牛やラクダが見事な筆致でリアルに描かれている。中でも金のラクダと銀のラクダが喧嘩し、金のラクダが相手の左足に白い歯をむき出して噛み付き、銀のラクダはその痛みをこらえるかのように木材に噛み付き耐えている。その争いを止めようとして、牧童が長い棒を銀のラクダの口の中に差し込んで、必死に

なつて引き離そうとしており、その様子に、黒い子牛は怒り狂って目を見開き大暴れしている。大胆とも思える動物咬合図である。画中の配置は一見ばらばらのようであつて、互いに整然と関連しあつて少しの乱れもない。こうした芸術性の高い生活絵画より、当時の楼蘭に住むソグド人の実生活と、死生観を垣間見ることができるといえる。

なお、入口すぐ右の南壁には、仏陀と伎楽天らしき絵が描かれている。これは中心柱の法輪や後室に数多く描かれた法輪の図柄と相まって、この古墓の主人が仏教徒であったことを意味している。仏教王国の楼蘭城の郊外に、サマルカンド方面から交易のために訪れ、集落を作つて移り住んでいるうちに、商売のために改宗したのか、それとも大乘仏教の深遠さに心打たれたのかは不明であるが、拜火教から仏教信者になつたソグド人がいたことは注目すべきことである。そうした意味で、このたびの魏晋時代の楼蘭の洞室墓の壁画の発見は、ソグド人と宗教についても考えさせられる世紀の大発見といえよう。

【参考文献】

- 『楼蘭文化研究論文集』 穆舜英・張平主編 新疆人民出版社 一九九五年刊
- 『楼蘭王国』 長澤和俊著 レグルス文庫64 第三文明社 一九八二年刊
- 『楼蘭』 千年の伝奇と千年の謎 穆舜英・梁越共著 外文出版社 二〇〇五年刊
- 『高昌楼蘭研究諸集』 侯灿 新疆人民出版社 一九九〇年刊
- 『さまよえる湖』 ヘディン著 関楠生訳 泉社 一九八一年刊

(やまだ かつひさ・委嘱研究員)